OUKA
Osaka University Knowledge Archive

Title	現代フィリピン・カトリック教会における歴史の記念の仕方
Author(s)	宮脇, 聡史
Citation	言語文化研究. 2016, 42, p. 163-178
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/56199
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

現代フィリピン・カトリック教会における歴史の記念の仕方

宮　脇　聡　史

Commemoration of History by the Philippine Catholic Church

MIYAWAKI Satoshi

Summary: This paper examines how the leadership of Catholic Church in the Philippines, the dominant religion, has constructed the way to commemorate history, by first reviewing author's past analyses on the basic framework of historical interpretation by the hierarchy of the church, and then examining their statements, events and museums about historical commemoration. The author concludes that the church's understanding about "the Philippines as a Catholic nation" based on the legacy of colonial Christianization has not only been consistent as a historical interpretation but also been reflected in the very low-profile performance on the historical commemoration, and their recent endeavor for commemorating the 500 years of Christianization can be futile without basic reevaluation of the history of the Church in the Philippines.

キーワード：フィリピン，カトリック教会，歴史の記念

序

人々は過去ではなく，あくまで今を生きる。歴史を学び続けようという志向や必然性のないところではなおさらである。従って，歴史が公的な意味を持つとすると，何らかの形で現在の問題と結びついているからであろうし，歴史を「記念する」という行為は一つの重要なものであろう。この記念するという行為は何らかの記念日，記念年などを契機として行われ，あるいは記念碑や博物館などを通して提示される。

筆者はフィリピン・カトリック教会の，主に公文書の分析を通じて，そこに描き出されてきたフィリピン像，国民像が，カトリック教会の司牧（ケア）の基本問題と密接につながっていることと，そこから生じる教会のさまざまな言説やアクションの意味を分析してきた。16世紀から19世紀末までのスペインによる植民地統治によって植民地国家として形成されたフィリピンにおいては，宣教の結果カトリック人口が大半を占めるに至り，現在も人口の 8 割がカト

リック信徒である[1]。その中で，教会の歴史観はその「国民像」を浮かび上がらせる際の根底にあるものである。これについての筆者の歴史観の分析（宮脇（2010））は，教会指導者層の言説の中でフィリピンにおける教会や国民，そして両者の関係に関するどのようなイメージが作り上げられてきたかの概要を示そうとするものであった。しかし公文書は，必ずしも庶民，一般信徒に向かって提示されているものばかりではない。従って筆者のかつての分析は，教会自身の自省と行動の原理的なものを明らかにしようとするものではあっても，教会が人々に発信し，共有し，指導しようと努めているのはどのような歴史なのか，を必ずしも明らかにするものとまでは言い切れなかった。つまりそれは，教会がどのように歴史の記念行為を行おうとしているのか，というふうに言い換えることができるだろう。

カトリック司教協議会（Catholic Bishops' Conference of the Philippines，以下CBCP）は，ペドロ・カルンソッドの列聖（2012）を契機に，キリスト教伝来500周年である2021年までの9年間，一連の特別な祝祭を実施すると宣言している。また2015年にはセブ大司教区において「サントニーニョ像再発見の奇跡」（カプラグ（Kaplag），1565年）450周年の祝祭が行われた。教会がどういう歴史をどういう形で発信してきたかを確認することは，こうした現状の中では一層重要ではないかと考える。

そういうわけで，この論文では，フィリピン・カトリック教会の指導者層がどのように歴史を記念しようとしているのかを，その基本的な様態と共に，その内容の分析と合わせて明らかにしようとするものである。

その意義としては主に二つ挙げられる。一つは上記の通り，フィリピンにおいて支配的な宗教であるカトリシズムの統括者である指導者層の歴史の記念のためのインフラとその様相を明らかにすることで，教会のあり方やその人々への働きかけの特徴と共に，それを鏡として映し出される，フィリピンの人々の歴史記念のありさまの一端を明らかにすることである。と同時に，それと関連して，フィリピンにおける歴史の記念のあり方全体を理解する一助ともしたい。というのも，フィリピンにおいてはカトリシズムは多数派というだけでなく，行政の弱さを補う市民社会の重要な一角をなしており，また歴史研究を含む研究・教育分野においても人材の輩出をはじめ大きな影響力，存在感を示しているからである。

1．フィリピン・カトリック教会と歴史観

先ず，本研究の前提として，フィリピン・カトリック教会指導者層の歴史観について，CBCPの公式文書を中心に分析した宮脇（2010）及びFrancisco（2014）に依拠して簡潔にまと

[1] フィリピンの国勢調査においてはほぼ一貫して自身をカトリックと見なす人口は8割を占める（但しフィリピン統計局がウェブ上に掲載している2010年の調査結果では6割未満となっているが，統計上の明らかな誤りがあるのでこれを採らない）。2000年の国勢調査によると，総人口7633万のうち，カトリック人口は6186万となっている。http://data.un.org/Data.aspx?d=POP&f=tableCode%3A28　2015年9月25日閲覧。Social Weather Stationsによる民間調査においてもほぼ同様である（Abad（2001））。

める。

1960年代のカトリック教会全体の近代化，1970年代以降の戒厳令体制の下で考察が始まり，1986年の民主化政変への積極的な関与と並行して進められた教会改革のデザインづくりの中で，CBCPはフィリピンにおけるキリスト教の位置づけを，歴史解釈を含めて明らかにしようとしてきた。その要点は「16世紀のカトリックの伝来及びスペインによる植民地統治，その下でのキリスト教社会の形成こそが，フィリピンをフィリピンたらしめる土台である」という理解である。

ここで，特に上記2つの研究を中心に近年のフィリピン史研究及び教会研究の成果を踏まえ，この教会の歴史理解が持つ特徴と考えられる点をいくつか指摘する。先ず，こうした理解は，現在もカトリック教徒が人口の8割を占めるフィリピンにおいては常識的な見方に沿っていると同時に，その詳細はカトリック系の大学で積み重ねられた実証主義的な歴史研究を踏まえており，教会の自己理解が人文・社会科学の批判との一定の対話の中で形成されていることを示している。しかし以下の通り，そこには問題がないとは言い切れない。

第2に，教会による宣教・統治の歴史に対する批判的な検討が欠けているという点である。まず植民地統治や宣教における負の遺産の看過が指摘される。また広範な領域を少数の宣教者が進めた宣教の評価という問題もある。そして何よりも，「国民社会全体」が一様にキリスト教に支配・影響されてきたとは言えないのではないかという問いを看過したまま，歴史理解に関して，人々／一般信徒の主体の側からではなく宣教者からの，宣教の成果を中心とした視点が無批判に取られていることは問題といえる。

さらにスペイン統治下でのキリスト教化と現代を直結して語ろうとするために，それ以外の問題が抜け落ちる点も問題である。まず庶民の歴史の重大な部分が抜け落ちている。非カトリック教徒が「国民」の視野の外におかれることに加え，カトリックの一般信徒に深く関わりあう土着的なものが，スペイン到来以前の歴史から現在の社会文化に至るまで，周辺的な扱いとなる。また近代化が「キリスト教社会」を世俗化させ，正統のカトリシズムから人々を疎外させた元凶として断罪されているが，その近代的な流動性の中でこそ人々が様々な情報や交流を形成し，新たな霊性を構築してきたこと，そこにカトリック教会内の刷新運動の活力も見いだせるかもしれないこと（Cornelio（2014））も看過される。

第3に，フィリピンの教会にとって歴史上の重大ないくつかの変化に触れていない。ひとつは20世紀前半のアメリカ統治下でスペインによる王権保護が解消され，政教分離の下で教会の体制が再編を余儀なくされた経緯とその結果の重大さに触れられていないことである。もうひとつは1960年代のカトリック教会の近代化改革によって，「アジア唯一のキリスト教（カトリック）国」たるフィリピンのカトリシズムを支えた神学や宣教実践のあり方が根本的な再検討を迫られたはずだが，この点を盛り込んでの歴史像の再検討がなされていない，という点である。さらに長期的には，20世紀の半ばまでカトリック教会内には外国人聖職者の優勢が続き，これ

に対する在地の聖職者たちの度重なる反発への抑圧は19世紀後半の自治・分離運動や20世紀半ばのナショナリズム運動とも深く絡んできたが，そのことの歴史的検証もなされていない。

筆者はかつて，こうした歴史観が，教会内外の歴史家の批判に遭いつつも続いてきた重要な背景として，教会指導者の司牧（宗教的な信徒ケア）上の基本的･構造的な必要を挙げてきた。それは聖職者一人当たり信徒数が1万人にも及ぶという圧倒的な人員不足が長年まったく解消されてこなかった中で，司牧がごく一部でしか機能しえない現状を，一方で信徒たちを「カトリック＝本物のフィリピン人」として鼓舞し，他方で教会が進めようとしている改革が進展しない状況の責任を外部者に惑わされる信徒の未熟さに帰し，そんな彼らを善導する指導者としてマスメディアやデモなどによる大規模な動員を通じて支持を繋ぎ止めようとする，という構図になる。この構図は1986年及び2001年の大衆動員による政変において教会が指導的な役割を果たすことができたことで確認され，維持されてきた。しかしそこにはもう一方で「フィリピン人＝カトリック」の枠の中にとどまりながら，遠くにいる聖職者にではなく，身近なグループや自分の確信に基づいて宗教生活を含めた日常を織りなしてきた人々の暮らしが，教会指導者のあり方と同床異夢的に共存している（宮脇（2006））。

従って，この論考で「歴史の記念」を取り上げるとき，こうした教会指導者の発信しようとしているメッセージが，それでは実際にどのように伝達されようとしてきたのか，の一端を明らかにすることになる。それは同時に，人々が歴史を記念する時に，教会のもたらそうとしてきた歴史の記念がどのような場所に入り込んできているのかの検討への見通しを示すものとなる。

ここで「歴史の記念」という概念について，もう少しその問題性を明らかにしておきたい。

テッサ・モーリス＝スズキはその主著の一つ『過去は死なない』において，「歴史の危機」を問題として取り上げている。歴史教育をめぐる国際的な論争を背景にした，過去の出来事をなかったものとしようとする「抹殺の歴史学」が起こり，それに対して歴史研究の側においても，ポスト構造主義の興隆の中で「客観的な歴史的事実」という概念を批判し，重層的な歴史の語りを容認するが故に，恣意的な「抹殺の歴史学」に対峙することが困難になっている，そういう状況である。モーリス＝スズキはこの「危機」に対して，多様な媒体，多様な語り手，多様な読者等が共働しつつ歴史の真実をできるだけ包括的に捉えていこうという営みを形作る「歴史への真摯さ」の態度の形成こそが指針となるのではないか，と主張している（モーリス＝スズキ（2014））。そこにおいては「歴史の記憶」は単に文書において歴史がどう語られてきたか，という歴史観の問題に留まらず，歴史観がどのような取扱いを経て，真摯に練り上げられようとしてきたかが問われている。その際，特定の歴史の語りが受け手に受け止められ，時には応答を生む場として，歴史を伝える媒体（メディア），及びその媒体が持つ特徴に特別に注意が払われている。特定のメディアの持つ特性と，コミュニケーション手段としての問題性

を含めて，歴史についての語りが共有される場でどういう課題が生じ，どのように歴史に対する真摯さが追及されうるか，という点にこの研究の大きな特徴が見て取れる。

筆者のこれまでのカトリック教会の「歴史の記憶」に関する研究は，主に公文書の分析であった。それは書かれた公式の歴史観である。しかし，上記のモーリス＝スズキの著作へのささやかな応答として，カトリック教会を巡る「歴史の記憶」を教会の「歴史への真摯さ」の問題として捉えようとする場合，既に研究してきた「歴史観」をどのように共有＝記念（commemorate > co+memorate 共に憶える）しようとしてきたのか，と併せて検討することが不可欠である，と考えるに至った。

以上の考えから，ここでは「記念」という言葉を，特に「歴史観の分析」では見落とされてしまう「情報発信の形態」に特に注目した上で「自分たちと関わる過去に関する取り組み，発信，表象の全体」として捉えている。

２．教会指導者の歴史記念の種類

フィリピン・カトリック教会の教会指導者たち，主にCBCP，司教たちなどの高位聖職者，主要な修道会などが歴史を記念するという際にどのような方法を用いてきたのであろうか。主要なものとして，公文書，イベント，博物館が挙げられる。

公文書における歴史記述は要理教育指導関連文書や教会会議の報告書などにもみられるが，これらは内部的な性格が強いため，「記念」行為の範疇に入れないこととする。他方，随時発行されるCBCPや各大司教区／教区（archdiocese/diocese，以下「教区」で統一）等の声明類（司牧書簡，司牧教書，司牧声明などと呼ばれるがここでは「司牧声明」で統一する）における歴史への言及は公的な声明であるため歴史を記念する行為としての性格を持つと考えてよいだろう。これらは記者会見やミサで読まれ，新聞記事や教会のニュースレターに内容が掲載されることである程度広まっていく。

イベントについては以下の通りである。まず教会の記念年の祝祭は，バチカンによって制定されるものに加え，CBCPや各教区等の判断によって祝われるものがある。と同時に，毎年祝われる小教区（parish）の祭りについても，一方で信徒たちや町による祝祭が主であるとはいえ，教会がその信心業の解釈や進め方について，正統教理の保持促進を目指して指示や干渉を加えることがある。さらに大司教区／教区の監督，あるいは支援の下で，例えば聖人の生涯についての劇や映画が作られることもある[2)]。

これら都度的に行われる行事に対して，記念碑や博物館は常設されていると共に，特定のイベントの会場として用いられることもある。教会に関わる記念碑や博物館は，教区，小教区，

2)　これらは記念というよりは文学的な表象の面や，あるいは特定の人物の顕彰としての側面が主であるとも言えるが，過去に関する想起を形にしたものとして，ここでは「記念」に含める。

修道会が設置するものに加えて，史跡として政府が記念碑を建てる場合もあり，篤志家の私財，信心家たちの献金による場合もある。常設で展示物を伴ったり，当該事件の現場におかれたりするという物理性も特徴としてあげられ，内容の力点が行事に比べて現在よりも過去の事象のそのものにおかれる傾向が強いことも予想される。

公文書で提示されてきた歴史観とどう関わっているか，意味づけがどのようにされているか，記念が人々にとってどの程度，どういう意味を持ちそうか，そして，フィリピンにおける歴史記念の中で，教会のそれはどういうふうに位置付けられるか，といった点が問われる。最後の点については，フィリピンにおける歴史記念それ自体との比較が不可欠であるが，この点については今回はごく試論的なものにとどめる。

３．公文書における歴史の記念

すでに述べたとおり，CBCPの歴史の記念が表されている公文書は主に司牧声明である。フィリピンには86のバチカンに直属する「教区」という教会行政の単位があり[3]，100名程度の大司教，司教が統括している[4]。その司教たちの全国レベルでの協議会が「司教協議会」であり，全体で一致して「司教団」として行動する面もあるが，基本的には教会位階制における教区の自律性を尊重し協議体としての側面が繰り返し確認されている。

司牧声明は主に議長を中心とする常設委員会が立案し，各司教に回覧されたうえで過半数の承認を経て公表される。通例は１月と７月の全体の定例会議で承認されて公表されるが，議長（２年任期で２期まで再選可）の判断で随時出されることもあるため議長次第でその数は増減する面もある。1970年代のマルコス大統領による戒厳令期以降，教会の政治，経済，社会等の諸問題への関与の増大と合わせて，司牧声明の数は増大傾向にある。1986年の民主化以降，カトリック教会の国民社会との関わりや教会としてのあり方を問い直す声の中，1991年の第２回フィリピン教会会議を契機に，1990年代後半には，フィリピン教会独自の要理書の発行と併せ，教会の政治，経済，文化に関する包括的な分析と立場の表明が司牧声明によってなされた。従って1990年代が，現代のフィリピン・カトリック教会の司牧声明に関する重要な分岐点をなしていると言える[5]。

---

[3] CBCPのホームページから。2015年９月25日閲覧。http://cbcpwebsite.com/

[4] 同上。現職の枢機卿２名，大司教（大司教区を統括）18名，司教（教区を統括，大司教の一定の指導を受ける）73名。引退した枢機卿２名，大司教12名，司教26名である。但し引退後も様々な形で教会の働きに加わる司教も少なくないので，100名程度，と概数で示した。

[5] 筆者はCBCPの司牧声明について分析調査を重ねてきた。主要なものとして，宮脇（2006）がある。また原文については以下を参照。CBCP Media Office,“CBCP Documents”, Online（checked on September 25, 2015） http://cbcponline.net/v2/?page_id=1807

戦後にフィリピンの司教たちによる協議会が結成されて以降発行された司牧声明のうち，何らかの形で歴史を記念する声明の題を以下列挙する。

1951 Joint Statement of the Philippine Hierarchy at the Close of the Holy Year（1950-1951）
1954 Joint Pastoral Letter of the Philippine Hierarchy on the Marian Year
1957 Draft of a Statement of the Philippine Hierarchy on the Feast of the Most Holy Rosary（“LA NAVAL”）October 7, 1957
1967 Joint Pastoral Exhortation of the Philippine Catholic Hierarchy on the Nineteenth Centennial of the Martyrdom of St. Peter and St. Paul
1975 Ang Mahal na Birhen: Mary in Philippine Life Today
1980 Papal Visit and Beatification of Lorenzo Ruiz
1984 Proclamation of a Marian Year for the Philippines
1985 Joint Pastoral Letter on the Marian Year
1985 The Marian Year 1985：A Pilgrimage of Hope with our Blessed Mother
1990 To Form Filipino Christians Mature in their Faith
1994 “Go… Make Disciples!”– A Pastoral Letter on the Fourth Centenary of the Archdioceses of Manila, Cebu, Caceres, Nueva Segovia
1997 Journeying Towards the Third Millenium“Walking in the New Life with Christ”
1998 Pastoral Exhortation Addressed to the People of God on the Philippine Centennial Celebration
2003 Celebrating Creation Day and Creation Time
2007 Towards a Second National Rural Congress
2008 Pastoral Statement on the Jubilee of St. Paul 2008-2009
2008 Upholding the Sanctity of Life（20 years after the CBCP Pastoral Letter What is Happening to our Beautiful Land?）
2012 A Pastoral Letter of the CBCP on the occasion of the 400 Years of Catholic Education in the Philippines
2012 CBCP Pastoral Exhortation on the Era of New Evangelization
2013 Celebration of the National Consecration to the Immaculate Heart of Mary on June 8, 2013.

特徴的なのは，聖年，聖母，聖人を祝う文書が多いことであり，フィリピンの教会史や一般史を特に取り上げることは少ないという点であるが，それはカトリック教会という世界的な宗教の特徴としては，別段不思議なことはないであろう。その中では「世界創造の日」を祝う2003年の声明は独特のスケールの歴史表現で興味深い。

また，CBCPの過去の声明や会合を回顧・記念する声明もある。環境問題に関する1988年の声明に関する20周年声明（2008年）や，1967年に教会の現代化を受けて初めて農村の社会問題

に本格的に取り組んだ「農村会議」の40周年を期して行われる第2回会議に関する声明は，教会の現代化改革の歴史が刻まれつつあることを示している。

そうした中で，フィリピンの歴史に触れたものとしては，「ラ・ナバル」と呼ばれる聖母マリア（スペイン植民者によるオランダの侵略の撃退に際しての守護者）を記念する声明（1957），日本でのキリシタン迫害の殉教者の一人ロレンソ・ルイスの列福（のちに列聖）を祝う声明（1980），1991年の第2回フィリピン教会会議に先立ってフィリピン人の霊性を回顧展望する声明（1990），マニラ，セブ，ヌエバ・セゴビア3教区の400周年記念（1994），フィリピン独立政府樹立100周年を祝う声明（1998），カトリック教育400周年（2012）が挙げられる。スペイン統治期の宣教を回顧し，これを現在のフィリピンのキリスト教社会としての特徴と結びつける傾向は，文書の主題からもある程度伺えるであろう。

この中では，1998年の声明が一般史を扱っていてやや独特である。順調な経済発展を背景に高揚した1996年（独立戦争勃発100周年）以降1998年6月の独立宣言100周年までの一連の独立革命の記念行事の中で，他の諸団体同様，カトリック教会もその祝祭に独自に加わる姿勢を見せた。独立革命が反修道会的な性格を持っていたため，カトリック教会は長年この歴史に対しては警戒的な態度を示してきたが，1998年の声明では基本的にこの革命の記念を祝福する姿勢を示している。但し，国の刷新のためには霊性の刷新が必要なので，教会はこれに応えるし，国民も宗教の重要性を再認識すべきである，という主張が加えられている。

もう一つ，特に注目に値するのは，2012年の「新しい宣教の時代に向けてのCBCPの司牧勧告」である。福者ペドロ・カルンソッドの列聖を契機とし，以降2021年のカトリックのフィリピン到来500周年までの9年間，年ごとに9つのテーマで新たな宣教の世紀に向けて備える，というプログラムの紹介がなされている。フィリピンのカトリック教会で，これほど長期にわたり，包括性のあるプログラムに基づいて歴史の記念行事を行ったことはなく，この一連のプログラムがどのような意味を持つのかは，今後検証する必要があると思われる。

４．イベントにおける歴史の記念

教会が関わる歴史を記念するイベントとしては，CBCPや各司教たちが声明を通じて宣言した記念年などの一連の行事がまず挙げられる。特に25年ごとにバチカンの呼びかけで祝われる「聖年」である。2000年の大聖年の祝祭は極めて盛大に行われた。序で述べた2021年の祝祭も全国的なものになることが予想される。但し，国を代表するような形で選ばれる列福，列聖の祝祭は，当該教区を中心としたものになる。フィリピン人の聖人として列聖された二人はそれぞれ，聖ロレンソ・ルイスはマニラ大司教区の，聖ペドロ・カルンソッドはセブ大司教区の聖人として祝われた面が強い。また宣教活動の記念年も各教区レベルで祝われるのがふつうである。

2015年のセブ大司教区の450周年祝祭が印象的であったのは，記念された1565年のスペイン

艦隊の到着が，引き続くフィリピン植民地の成立を考えると全国的に祝われても不思議のないことでありながら，主に1521年のマゼラン艦隊到着時に贈り物とされたサントニーニョ聖像の「再発見」(Kaplag) に焦点を当てる形で，もっぱらセブ大司教区で祝われていることである。3，4月に一連の祝祭が行われた後も，筆者が訪問した8月にも関連の歴史事象等が細かに記された看板が掲げられ続けられていたが，それはマニラの教会では見られなかった。

写真１　セブ・サントニーニョ教会の前面に掲げられた「聖像再発見450周年」の記念説明板。

小教区レベルになると，その主な祝祭は毎年行われる守護聖人の祭りである。一方でこのフィエスタにおいては司祭の役割は限定的であり，またそれぞれ地元の慣習があり，時には観光客の増大などの状況の中で変化しつつ続けられている。特に聖像にまつわる奇跡譚などが語られる場合もあり，それはマニラのバクララン教会のように聖母への感謝状という形を取ったり（Sapitula（2014））, ノベナと呼ばれる祈祷集会の式文や解説書に反映されたりしている（Mojales（2002））が，語り伝えられた言葉が研究者やジャーナリストの手によって残されるのみであることも少なくない。このレベルでの祝祭に関して興味深いのは，近年はその信心業や祭りについて，その内容が教会の意向に沿ったものであるかどうかを審査，監視するようになってきているということである。奇跡譚については事実性と内容の正統性が問題となるし，

また聖人や信心業の由来についても，モハレスがセブのガダルーペ信心のケースで述べている通り，教会当局の都合で由来が変わったりすることもあったという。祭りの進め方について小教区教会の司祭が介入し騒動となるケースも報告されている（川田（2003））。

劇に関しては，聖人や誕生日を迎えた高位聖職者の生涯についてのものが見られる。筆者は1999年にケソン市クバオで，当時のマニラ大司教シン枢機卿の半生を，特に彼が存在感を示した1986年の民主化政変における活躍を中心にドラマ化して顕彰したものを見た。入場無料で，観客は主にカトリックの学校から遠足で動員されてきたと思われる学生たちであった。一定の反響があったことは，現地Philippine Star紙の日曜版に特集が載せられていたことでもわかる。とはいえ，これはあくまでその時限りのものであり，作品として後々まで上演され語り継がれるものではなかった[6]。2012年のペドロ・カルンソッドの列聖の際も，いくつかの書物やコミックの出版と共に，劇や映画の上映があった[7]が，これも教会によるキャンペーンがあり，新聞には取り上げられたが。やはり列聖を祝う一過性のイベントであった。

以上のように見ていくと，そこにおける歴史の記念の仕方には以下の特徴がある。

日常的なレベルでは，小教区の守護聖人の祝いがあり，そこでは教会による正しい祝い方への介入があるが，基本的には町の祭りの中に埋め込まれている。教会自体の歴史は，教会の公文書において，また一般史においても多くの場合に，基本的にフィリピンという国のレベルでの出来事として記述されてきたにもかかわらず，全国的な祝祭になることは少なく，キリスト教の伝来に関わる祝祭すらも実質的に当該大司教区のみで祝われる。国を代表するような形での列聖も，教会政治の構造を反映して大司教区による祝祭が中心となる。そして二人の聖人は共にフィリピン外で殉教しており，カルンソッドに至っては出身地もはっきりしないためか，伝統的に聖母とサントニーニョへの信心が他の聖人の存在を圧して強かったフィリピンにおいて，フィリピンの歴史との関わりのあるこれらの聖人たちの位置は特に大きいとは言えないし，彼らの登場によって例えば「この際我らが国の聖人をもっと信心しよう」という運動が起こるというような形で状況が変わった様子も見られない[8]。

歴史の記念はむしろ，特に19世紀末の独立革命に関する舞台や映画などを通じて，教会の外

---

6) シン枢機卿に関しての筆者の論考として，宮脇（2008）がある。

7) CBCPのニュースサイトでもこの映画について取り上げられている。
http://www.cbcpnews.com/cbcpnews/?p=28207 （2015年9月25日閲覧），またこの映画のFacebookのサイトがあるが，2012年の上演の直前で更新が終わっている。
https://www.facebook.com/PedroCalungsodBatangMartir （2015年9月25日閲覧）

8) フィリピンの書店にはキリスト教書が少なからず置かれており，聖母信心についての本は多く置かれているが，ルイスやカルンソッドの本は，一般向けのコミックも含めほとんど見られず，カトリックの専門店で接する程度である。カルンソッドについては例えば，セブ大司教区の依頼の下，列聖の審査に関わる資料を基に書かれ，セブ大司教ホセ・パルマの序文が付された点で公的性格の強いはずのAgualada（2012）の伝記にして既に，かなり薄い本にもかかわらずありとあらゆる憶測に満ちており，カルンソッド本人の伝記的事実についての情報がきわめて限られていることが窺われる。つまり，歴史的事象や個人の成果を振り返ることよりも，とにかくその聖人を崇め（顕彰し），その聖人をめぐる信心業を進めることに力点が置かれている。またカルンソッドが加わったグアムでのスペインによる宣教は植民地支配と密接にかかわっている点も問題を孕んでおり，この点はカルンソッドが仕えた聖ディエゴ・デ＝サン＝ビトレスの列聖の際に問題となっている。

で活発に行われている。革命は反教会の志向が強く，また革命の過程でカトリックからフィリピン独立教会が分離した経緯もあり，教会史家や教会系の歴史家のこうした分野での研究への参加は十分あるものの，聖職者が積極的な役割を果たすことも，また教会がこれらに答えて教会として革命に関するイベントを積極的に打つこともごく限られている。それは1996－８年の革命100周年の一連のイベントにおける教会の限定的な関与に表われており、当時の教会の関心はフィリピンの歴史というよりも世界教会のイベントである2000年の大聖年祝賀への準備に向けられていたと言える。

以上を合わせると，公文書に表れたキリスト教ナショナリズムというべきビジョンに相反して，教会のイベントにおける歴史記念は教区，小教区のレベルに分散していたり，世界教会との結びつきが優先されていたりしている。事実上の国民教会を自負しているにもかかわらず，歴史の記念の仕方についてはナショナルなまとまりを志向しているとは言い難い。

５．記念碑・博物館における歴史の記念

司牧声明の発行やイベントの開催は一過性が強いが，それに対して記念碑や博物館，また記念の教会は常設されている。

教会の統治構造上，教会の歴史を記念する施設は，基本的に大司教区・教区，あるいは個々の小教区や修道会立の教会に付属する形を取る。代表的なものとして，セブ大司教区の大聖堂付属博物館，アグスティン修道会付属のアグスティン教会博物館（マニラ）やサントニーニョ博物館（セブ）が挙げられる。またセブのパリアン博物館（イエズス会ハウス）は過去にイエズス会が使用していた古い建物の一部を利用している。

アグスティン教会博物館とセブ大聖堂付属博物館で印象的なのは，歴史ある立派な建物の中に，主にスペイン時代の遺物や芸術品などが雑然と並べられている様である。そこには「古いものがたくさん置かれている」という状況があり，歴史をたどる，という目的感覚が希薄である。セブ大聖堂付属博物館には一部歴史記述があったが，前半はアメリカ統治期にスペイン統治期の主要な史料を英訳・編纂した*Philippine Islands*という書物からの歴史記述の引用がほとんどで，しかも明らかな引用ミスが散見するものであり，真摯な学問的取り組みが基本的になされていないことは一目瞭然であった。またその記述の後半部分は大聖堂の破壊と再建の年表が延々と掲げられていた。また大聖堂付属博物館の１階には来年持たれる予定の世界聖体大会に関連して，過去に世界各地で持たれた大会のパンフレットなどの展示があった。またメインの展示の隣には，前任のセブ大司教で引退したばかりのビダル枢機卿を顕彰する経歴等の展示がなされており，その色鮮やかな展示は，モノトーンなメインの歴史展示と対照をなしていた[9)]。

9)　筆者はアグスティン教会博物館には過去に数度訪問している。セブ大聖堂付属博物館には2015年８月22日に訪問した。

サントニーニョ博物館は教会の脇の新しい建物の中にあるが，基本的に，多くのサントニーニョの聖像が個々別々の説明付で数多く並べられており，重複する説明も多かった。ただ，既にBautista（2010）がセブ固有のこととして注目している通り，セブこそがキリスト教伝来の地であり，それゆえにセブこそキリスト教国フィリピンのキリスト教の中心地である，という記述がいくつも見られることは興味深い[10]。

パリアン博物館は鉄工場の中にあるという見慣れない姿と相反して，極めて整然とした展示がなされており，セブ，そしてフィリピンにおけるイエズス会の活動の経緯が，世界におけるイエズス会の宣教活動の背景と併せて明快に展示されており，さらにドミニコ会修道士で歴史学の研さんを積んだ専門的な知識を持った解説員が待機していたことにも驚いた。ここでのメッセージはサントニーニョ博物館で見かけた説明を裏書きするものであった。つまり，セブこそ世界宣教に触れたアジア宣教の歴史の要の一つであり，イエズス会はそこにおいて大きな歴史的役割を果たし，パリアンに残るこの博物館の建物は，18世紀に建物が立って間もなくイエズス会が追放されるところからの数奇な運命を超えて今その歴史を証している，というものであった。フィリピンでこれまで見てきた博物館の中でも，後述のアヤラ博物館，フィリピン国立博物館，セブ博物館に次ぐほどの明快な展示からのメッセージが，セブの人たちだけがひそかに自負しているであろう「セブ固有のナショナルヒストリー」であったことは興味深かった[11]。

写真２，３　パリアン博物館。整然とした内部の展示。建築された1730年という数字が刻まれている。

[10] サントニーニョ博物館には2015年8月21日に訪問した。

[11] パリアン博物館には2015年 8 月25日に訪問した。

博物館以外に歴史を記念する施設としては，マニラ首都圏にあるEDSA大聖堂は欠かせない。1986年2月にクーデタに失敗した軍改革派に対する鎮圧作戦を，マニラ大司教がラジオで行った呼びかけに答えた群衆が非暴力で食い止め，民主化政変に至った出来事は，教会の威信を大いに高めた。この舞台となったエピファニオ・デ・ロス・サントス通り（EDSA）に1989年に建てられたのがこのEDSA大聖堂である。聖堂の上に巨大なマリア像が立ち，外壁には1986年の出来事，及びのちに加えられた2001年のエストラーダ大統領を辞職に追い込んだ政変のレリーフが飾られている（Claudio（2013））。これはEDSA通りやマカティにある他の記念碑などと共に教会が主導したとされる「ピープルパワー」を記念する一連の記念碑の一角をなしている。マニラ首都圏の中では，この教会堂と像こそが，他の教会が歴史を記念する記念碑や博物館と比べ物にならないほどの存在感を持っている。クラウディオも指摘する通り，マニラの大きなカトリック教会の中で，この教会は地域の中心的な広場に建てられた伝統的な教会ではなく，むしろビジネス街の一角にそびえる極めて近代的な教会である。そしてカトリック教会が声明などで繰り返し「フィリピン国民の守護者」と述べてきた聖母マリアの巨大な像をその上に載せたこの教会は，現在のフィリピン・カトリック教会が，自分たちをどのような存在として理解しようとしているのかを象徴している[12)]。

写真5，6　EDSA大聖堂，及び民主化政変を描いたレリーフ。

筆者はマニラとセブにおける数度の滞在の中で，教会系でない歴史博物館をいくつか観察してきた。最も整った展示が先史から独立まで，ジオラマの形で確かめられるのがマニラ首都圏マカティ市のアヤラ博物館である[13)]。フィリピン国立博物館はスペイン統治期以前の展示，及びスペイン統治下に置かれなかった山岳諸民族に関する展示がきわめて充実している[14)]。スペイン期以来の刑務所を改築したスグボ（セブ）博物館（Museo Sugbo）は主催機関別に4種類

12)　2007年5月27日に訪問した。

13)　筆者は頻繁に訪れているが，直近の訪問は2015年8月30日である。

14)　2012年8月25日に訪問した。

の展示，訪問時には，それぞれ先史から大戦末までの展示と通史，先史から現代までの政治史概略，スペイン時代の教会による統治に関する文書資料の展示，ジャーナリズムの歴史が展示されていた。特にセブ博物館における国立公文書館主催の教会による統治に関する展示は充実しており，教会の歴史的正統性，国民のキリスト教的アイデンティティを強調しているはずの教会よりも詳細な展示を行っていた。それがフィリピンのキリスト教発祥の地を自負するセブの州立博物館であったことも象徴的に思える[15]。

写真７，８　スグボ（セブ）博物館。1870年以降2004年まで刑務所等として用いられたとある。

６．考察

スペイン期の宣教を起源とする「キリスト教国フィリピン」のアイデンティティを強調してきた教会は，現代のフィリピン社会の歴史のイメージとやや乖離した歴史像を，教会の正統性原理の強化のために活用する方向で議論を重ねてきた。しかし実際に歴史をどのように人々に向けて発信しようとしているかを概観してみると，実はそういう歴史観にもかかわらず，歴史の記念は機会的，あるいは地域ごとにまちまちであることが見えてくる。その中で最も大切にされているのは，自分たちの地域の重要性の土台となっている歴史，あるいは現代の教会の正統性を支える最近の出来事であった。

また視点を人々の側に移せば，スペイン風の教会は自分たちが昔からカトリックだということのしるしであることを想起させるかもしれないが，教会がそれを今と結びつけようとしても，

[15] 2015年８月25日に訪問した。ほとんどの展示が英語とセブアノ語で記されていたが，この建物が長らく刑務所であったことについては入り口の説明版に何故かフィリピン語（国語）とセブアノ語のみで記され，英語の説明はなかった。

文書はなじみが薄く，イベントは機会的に過ぎず，教会の博物館は十分活用できる状態にない。むしろ活発で新しい歴史記念へのチャレンジは，教会外の博物館や劇，映画の中にある。特にここ数年，革命についてはアギナルド大統領，アントニオ・ルナ将軍の映画が上映され話題を呼んでいる。一般史に関して開かれるようになった教会だが，それでも教会の司牧の観点から警戒し，監視する姿勢も残っている。

イエズス会士の教会史家デ＝ラ＝コスタ，及びその後継者シューマッカーは，守旧的で学問を危険視する教会当局とのせめぎ合いの中，史料批判に基づく歴史研究を進めつつ，スペイン統治期の歴史に関する教会，特に修道会の擁護を精力的に行った。彼らは一方で教会の歴史認識に近代的な反省をもたらしたが，他方で教会の歴史的アイデンティティの批判的検討を促すという点では限界があった（Aguilar（2010），Schumacher（2011））。

カトリック教会の歴史の記念のあり方にみられるある種の消極性，分散性は，モーリス＝スズキの言葉を借りれば，歴史の記憶に関する「真摯さ」を積極的に追及できず，守勢に立っている教会の現状を象徴しているようにも思える。但し，この点については現在進行中の宣教500周年を記念する一連の教会の活動に関する評価と併せてより実証的に検討することでより一層明らかにできると思われる。

しかし，同じくイエズス会を中心に起こってきた新しいキリスト教理解，社会理解の流れも起こってきている。2014年にイエズス会のアテネオ・デ・マニラ大学で出版された学会誌*Philippine Studies*のカトリシズムについての特集号において，イエズス会士ホセ・マリオ・フランシスコによる教会の国民観に関する本格的なクリティークが掲載されている。そこでは歴史や民族性を固定的に捉える見方に関する根本的な批判と共に，動的で対話的な仕方で国民的状況の変遷を直視するかどうかが今後の変革の鍵である，と提言している（Francisco（2014））。

既存の歴史観に消極的な利益を見いだしてきた教会は，こうした提言を聞いて変わっていくだろうか。また歴史の記念の仕方は，これからどう変容していくであろうか。

文献

川田牧人　2003『祈りと祀りの日常知－フィリピンビサヤ地方バンタヤン島民族誌－』九州大学出版会。

宮脇聡史　2006『現代フィリピン・カトリック教会の政治・社会参与と教会刷新』東京大学大学院博士論文。

宮脇聡史　2008「シン枢機卿とフィリピン：序論的考察」東洋文化研究所紀要．第153冊，2008-3，pp. 142-126

宮脇聡史　2010「フィリピン・カトリック教会の公文書に見られるフィリピン史解釈」東洋文化研究所紀．第157冊，2010-3

モーリス＝スズキ，テッサ　2014（田代泰子訳）『過去は死なない―メディア・記憶・歴史』岩波書店。

Abad, Ricardo G. 2001“Religion in the Philippines”, *Philippine Studies*, 49（3）: 337–367.

Agualada, Salvador G. 2012 *Pedro Calungsod: Patron for the Filipino Youth*, Claretian Publication.

Aguilar, Filomeno V. 2010“The Making of a Church Historian and a Filipino: A Conversation with Fr. John N. Schumacher, S.J.”, in *Philippine Studies* 58（1-2）, pp. 273-296.

Bautista, Julius. 2010 *Figuring Catholicism: An Ethnohistory of the Santo Niño de Cebu*, Ateneo de Manila University Press.

CBCP Media Office,“CBCP Documents”, Online（checked on September 25, 2015）., http://cbcponline.net/v2/?page_id=1807

Claudio, Lisandro E. 2013 *Taming People's Power: EDSA Revolutions and the Contradictions*, Ateneo de Manila University Press.

Cornelio, Jayeel S. 2014 “Popular Religion and the Turn to Everyday Authenticity: Reflections on the Contemporary Study of Philippine Catholicism”, in *Philippine Studies* 62（3-4）, pp. 471–500.

Francisco, Jose Mario C. 2014 “People of God, People of the Nation: Official Catholic Church Discourse on Nation and Nationalism”, in *Philippine Studies* 62（3-4）pp. 341-376.

Morales, Resil B. 2002“Stalking the Virgin”, in Resil B. Mojares, *Waiting for Mariang Makiling: Essays in Philippine Cultural History*, Ateneo de Manila University, pp. 140-170.

Philippine Studies. 2014“Special Double Issue: Filipino Catholicism”, *Philippine Studies* 62（3-4）.

Sapitula, Manuel Victor J. 2014“Marian Piety and Modernity: the Perpetual Help Devotion as Popular Religion in the Philippines”, in *Philippine Studies* 62（3-4）, 399-424.

Schumacher, John N. 2011“The Rizal Bill of 1956: Horacio de la Costa and the Bishops”, in *Philippine Studies* 59（4）, pp. 529-553.